

2014年  
第20回

函館港イルミナシオン映画祭  
第18回シナリオ大賞受賞作品

準グランプリ

# サンセット 理髪店

成田 匡希





【作者プロフィール】

なりた まさき

1967年松前郡福島町出身。高校時代の3年間を函館で過ごす。

1996年より独学でシナリオを書きはじめる。

広告代理店等を経て、現在は札幌市の広告制作プロダクションに勤務。

《受賞歴》

1997年 第2回函館山ロープウェイ映画祭シナリ

オ大賞／グランプリ「ママチャリ・ライ

ダー」

2012年 第40回創作ラジオドラマ大賞／大賞「二

人に合わない」

【あらすじ】

函館の街にある古ぼけた理髪店。時代から取り残されたような店には、店主の朝日勇作の人柄と、彼がいるコーヒーに惹かれて、古くからの常連客が集まってくる。

ある日、若い中学教師・椎名まどかが店を訪ねてくる。彼女のクラスの桜井恵介が、勇作の店で奇抜なヘアスタイルにしていることを知り、やめてくれるよう頼みに来たのだ。

恵介は、勇作とは無二の親友の孫で、小さな頃からこの店で散髪しているのだが、ここ最近、校則に違反する髪型を注文するようになっていた。なにか理由があるらしいのだが、誰にも言おうとしない恵介。恵介を自分の孫のように思っている勇作は、

なにも聞かずに言う通りにしている。

恵介の祖父・武夫は、青函連絡船の元船長で、今は青函連絡船記念館摩周丸で観光客のガイド役を務めている。そんな武夫が、がんで入院することになった。ショックを受ける勇作に、追い打ちをかける事態が訪れる。剃刀がうまく扱えなくなり、その原因も不明だと言うのだ。医者にもしばらく様子を見るしかないと言われ、落ち込む勇作。

店を閉めたままの勇作に、常連客の吉岡が「手先が思うように動かないなら、出来ることだけやればいい」とアドバイスする。恵介が力士を指すと知り、闘病への気持ちが高まった武夫の影響もあって、勇作はもう一度前向きな気持ちを取り戻す。

力士になったら好きな髪型にはできなくなるので、今のうちにいろいろ試しておきたかった……それが、恵介が奇抜な髪型にしていた理由であった。その決意を知ったまどかも、恵介を応援しようと思う。

再開した朝日理髪店は、顔そりなしで料金を下げ、バリカンの丸坊主なら五百円というスタイルに変わった。おかげで少年野球の子供たちがやってくるなど、活気が出てきた店で張り切る勇作であった。

【登場人物】

朝日勇作 (81)

理髪店店主

テレビ番組制作会社 A D  
観光客の中年夫婦

桜井武夫 (81)

勇作の親友・元青函連絡  
船船長

青函連絡船記念館係員  
ドラッグストア女性店員

船船長

焼鳥屋店主

桜井恵介 (15)

武夫の孫・中学三年生

喫茶店マスター

椎名まどか (27)

恵介の担任教師

女医

志賀 (42)

まどかの同僚教師

幼い頃の恵介

沼田 (70)

理髪店の常連客

男子生徒 A・B・C

吉岡 (78)

理髪店の常連客・元大学  
教授

小学生 A・B

遠藤／清水／坪田

理髪店の常連客

## ○函館の街

現在と過去が入り交じったような街のんびりと市電が走る。

## ○市電の車内

客はまばら。

スーツ姿の若い女・椎名まどか（27）が乗っている。

どこか緊張したような表情。

## ○とある電停

向こうからやってきた市電が止まる。

降りてきたのはまどかだけ。

自分を奮い立たすように空を見上げる。

## ○街角

レトロな建物が残る街を歩くまどか。時折、スマホのナビを確かめながら。

## ○朝日理髪店・外観

昭和初期に建てられたと思しき建物。

レトロというよりおんぼろ、あばら屋に近い外観。

色あせた『朝日理髪店』の看板。

## ○タイトル「サンセット理髪店」

## ○朝日理髪店・外

ちょっと離れたところから店の様子を伺っているまどか。

まどか「大きく息を吸って」……よしっ」

と、理髪店へ向かって歩き出す。

扉が勢いよく開き、中からラフな格好の若い男が泡を食って飛び出てくる。

若い男「(悲鳴) ひ……やめてください」

その後が続いて、ゴマ塩頭の老人が出てくる。

激怒している老人、この理髪店の店

主・朝日勇作(81)である。

勇作「馬鹿にすんなこの野郎！」

勇作、手にはよく切れそうなハサミを持っている。

若い男、必死の形相でまどかの横をすり抜けるように逃げていく。

ぽかんとして、その姿を目で追っているまどか。

その足下に、どさりとなにかが落ちる。

まどかが見ると、小洒落たシヨルダーバッグがある。

勇作「おい、忘れもんだ」

若い男、あわてて戻ってきてバッグを拾い、すぐにまた逃げ去る。

勇作「二度と来るなッ！」

真つ赤な顔で鼻をふくらませている勇作。

店の前で固まっているまどかに気づいて素に戻る。

勇作「ああ……お嬢さん申しわけねえな、びつくりしたべさ」

まどか「……あ、いえ」

勇作「まったく……とんでもねえ野郎でさ、

つい頭に血がのぼって……」

と、頭を搔いて。

まどか、どうしようか迷っている。

勇作「？」

### ○朝日理髪店・店内

昔ながらの床屋という風情の店内。

建物も理容器具類もすべて古びているが、きちんと掃除や手入れが行き届いている。

視線をあちこちに送ったり、どこか落ち着かない様子で古い革のソファに座っているまどか。

その前の小さなテーブルに、コーヒ―を置く勇作。

まどか「あ、おかまいなく」

勇作「さっきの野郎に出そうと思ってたコ

ーヒーで悪いけど」

まどか「あの」

勇作「ん？」

まどか「どなたですか、さっきの方」

勇作「うーん、テレビ番組の制作会社の

……なんとかディレクターだか」

まどか「テレビ番組？」

勇作「ああ、ウチの店を取材させてくれって」

まどか「すごいじゃないですか」

勇作「なにがすごいもんか、見てみれやこれ」

と、テーブルの上に番組企画書を置く。

そのタイトル「助けて！ 今にも潰れそうな店の老店主たち（仮題）」

まどか「……（納得）」

勇作「こんなボロボロな店だけどな、今にも潰れそうってのはちよつと……」

まどか「失礼ですよね」

勇作「まったく、大きなお世話だべや。そりや大繁盛してるわけじゃないけどよ、常連客だっているし、おれひとりかなんとか食うくらいはやっていけてんだよ、これでも」

まどか「そうなんですか」

勇作、まどかの名刺を見ながら。

勇作「……で、椎名まどかさん。中学校の先生がウチになんの用だね？ まさか髪切りにきたのか？」

まどか「まさか」

勇作「だべな」

まどか「あの、実は桜井恵介くんのことです」

勇作「恵介の？」

まどか「担任として、折り入ってお願いがあります」

勇作「なんだべ」

まどか「桜井くんが、このお店で髪を切っていると聞きました」

勇作「そうだよ。タケとは幼なじみでな」

まどか「タケ？」

勇作「ああ、恵介のじいさんな、桜井武夫。物心つく前からずっと、恵介の髪はおれが切ってる。子どものうちはともかく、ちよつと色気づいてくると、男でももっと洒落たヘアサロンだの美容室だのに行きたがるもんだけどな、どういうわけだかずっとここさ通ってくるんだわ」

まどか「もう、やめていただけませんか」

勇作「やめるってなにを。まさか店をたた

めってか」

まどか「まさか」

勇作「じゃあなんだ」

まどか「桜井くんの髪を切るの、やめてく

ださい」

勇作「どういうことだ」

まどか「あ、正確に言います。桜井くんの

注文通りに髪を切るのはもうやめてくだ

さい」

### ○中学校・教室・外（回想）

3年D組のプレート。

教室のドアを開けて入っていくまど

か。

### ○中学校・教室・中（回想）

「今度はこうきたか」「なかなか似合  
ってんな」「また怒られるよ」など、

教室の一角が生徒たちでワイワイと  
賑わっている。

まどか「こら、とつくにチャイムは鳴って  
るでしょ。早く席について」

自席に戻る生徒たち。

今まで彼らに囲まれていた席に座っ  
ている大柄な生徒、桜井恵介（15）。

その髪型——ド派手な赤い色のモヒ  
カン。

まどか、またか……という顔でため  
息をつく。

○中学校・生活指導室（回想）

狭く、取調室のように殺風景な部屋。

泰然と座っている恵介。

その隣に付き添うように、まどかが小さくなって立っている。

赤いモヒカン頭を苦い顔で見ているのは、髪の薄い男性教員・志賀（42）。

志賀「何度目だ？」

恵介、無言で指を折る。

志賀「これで五回目だ」

まどか「志賀先生、六回目です」

志賀「五回も六回も同じッ」

まどか「すいません」

志賀「何度も何度も同じ注意をしなきゃな

らんこっちの身にもなってくれ」

恵介「……すいません」

志賀「悪いと思ってないヤツに謝られても、

腹が立つだけなんだよ」

恵介「……」

志賀「なあ桜井、気持ちはわからんでもないけどな、あと何年か待ってみたらどう

だ？ 高校を卒業すりゃ、あとはめんどくさい校則なんてないから、どんな髪型

にしようがお前さんの勝手だぞ」

恵介「……そんなに待てない」

志賀「え？」

恵介「今しかないんです」

志賀「どういうことだ」

恵介「それは……」

まどか「なにか理由があるの？」

恵介「（小さくうなずいて）でも、まだ言い

たくない」

三人ともしばし無言。

志賀「ふうん、まあいいや。明日までに直

してこいよ、髪の毛」

恵介「はい」

志賀「それにしても毎度毎度無駄なことだ

な、ご苦労さん。もう帰っていいぞ」

恵介、立ち上がると小さく一礼して

部屋を出て行く。

志賀「なんなんだろうね、理由」

まどか「さあ」

志賀「ま、無駄なことがやれるのも若さの

特権ってやつだけど。いろんな髪型に挑

戦したくつても、こうなっちまっちゃね

え……」

と、寂しくなった頭をびしゃびしゃ。

まどか「(思わず) そうですねえ」

志賀「椎名先生」

まどか「あ、すみません」

志賀「ここ笑うとこだよ、せめて苦笑くら

いしてよ」

まどか「すみません」

志賀「まわりに反抗してるって感じでもな

いんだよな……なんなんだろう」

○朝日理髪店・店内

首をかしげるまどか。

まどか「なんなんでしょう、本当に」

勇作「さてねえ」

まどか「わからないんですよね、本人に聞

いてもなにも言わないし」

勇作「言わないべな、あいつは」

まどか「でも、これ以上繰り返すのは本人

にとって良くないんです。内申点が悪く

なると来年の受験にも響きますし」

勇作「受験……そうか、恵介もそんな年か」

### ○朝日理髪店・店内（回想）

ヘアカタログを広げて、ド派手な赤

毛ソフトモヒカンのモデル写真を指

差している恵介。

面白そうに覗き込む勇作。

まどかの声「だから、朝日理髪店さんで桜

井君の言う通りの髪型にするのをやめて

いただければ……」

勇作の声「要するにあれだべ、校則違反」

まどかの声「そうです」

恵介の髪を染めはじめる勇作。

勇作の声「それは恵介もわかってんだべ、

違反してるって」

まどかの声「もちろん。何度も注意してき

ましたし」

ワクワクしながら、鏡の中の自分を  
見ている恵介。

### ○朝日理髪店・店内

勇作「いいんでないかね、自覚してるんなら。

だから次の日には丸坊主にしに来るんだ」

まどか「確かに、注意するとすぐ直してく

れるんですけど」

勇作「たかが校則だべ、そんなに目くじら

たてることもねえべさ」

まどか「（憤慨）たかがって」

勇作「ほかには？ なにか問題でもあるの

かい」

まどか「いえ、ほかにはなにも。遅刻も不登校もありませんし、髪型以外は全く問題のない、むしろ模範的な生徒なんです」

### ○中学校・廊下（回想）

女子生徒が重そうな荷物を抱えてヨロヨロしている。

近寄って、なにも言わずに代わりに持つてやる恵介。

遠くからその様子を見ているまどか。まどかの声「面倒見が良くて、クラスメイ卜からも頼りにされている存在ですし」

### ○朝日理髪店・店内

勇作「血は争えねえな。タケもガキの頃から人の面倒ばっかり見て、貧乏くじ引く

ようなヤツでな」

まどか「成績だつて悪くないんです。学年全体でも上の方で、トップクラス以外ならどの高校にも入れるくらいの成績で」

勇作「へえ、大したもんだな。確かにあいつは賢いんだガキの頃から。そういえば昔こんなことが……」

まどか「（遮るように）とにかく」

勇作「はい」

まどか「もうやめていただけませんか、桜井君の言う通りのヘアスタイルにするのは」

勇作「うーん、そう言われてもなあ……なにしろお客の注文だし……」

まどか「明らかに校則違反なんですよ！それに手を貸すようなことはやめてくだ

さい、担任としてそうお願いしてるんです」

勇作「だけどなあ……」

まどか「たかが中学校の校則ですが、ルールはルールです。それを守ることの大切さを子どもたちに教えるのも、大人の役目なんじゃないでしょうか」

勇作「いや、だけど……」

まどか「間違っていますか、私」

勇作「まあまあ。仮におれがあんたの言う通りにしたとして、恵介がウチで思うような髪型にできなくなっただとするわな」

まどか「はい」

勇作「そしたら、それこそどっかよそのへアサロンだの美容室だのに行けばいいだけの話だべ」

まどか「……あ」

その可能性についてまったく考えていなかったらしいまどか、みるみる顔が真っ赤になる。

勇作「ウチで断ったって、根本的な解決にはならんべさ」

まどか「……」

カランと音がしてドアが開き、

沼田「空いてたかい？」

と、常連客の沼田(70)が入ってくる。

勇作「沼田さん、いらっしやい」

沼田、まどかを見て目をパチクリ。

沼田「あら、お客さんか。出直すべか」

勇作「ふふ、おれの新しいコレだ」

と、小指を立ててニヤリ。

沼田「(鼻で笑って) また馬鹿言ってる」

勇作「(まどかに) 悪いけどもう帰ってけれ」

まどか、立ち上がった、

まどか「(消え入りそうな声) お邪魔しまし

た」

と、小さく頭を下げるとぼとぼと出

て行こうとするが、ドアの前で一度

立ち止まって振り返り、

まどか「でもやっぱり、お願いします」

深々と頭を下げた出て行くまどか。

それを興味津々で見ていた沼田。

沼田「誰なのさ、本当は」

勇作「誰だっといういべやそんなこと。お前

に関係ねえべ」

と、席に促す。

沼田「(座りながら) あら、冷たいんでないの。

何十年来の常連だよ、大事にしてよ」

勇作「悪い悪い」

沼田「で、誰なのさ?」

勇作「(笑って) クレーマーだ」

沼田「クレーマー」

○朝日理髪店・外(翌日)

「本日定休日」のプレート。

○函館の街

自転車で走る勇作。

○函館駅前

朝市の前を走り抜ける勇作。

前方に大きな船が泊まっているのが

見えてくる。

自転車を止めて見上げる勇作。

## ○青函連絡船記念館摩周丸・外観

かつては青函連絡船として運行していたが、今は港に停泊し、記念館となっている摩周丸。

入口の階段をゆっくりと上がってゆく勇作。

## ○青函連絡船記念館摩周丸・内部

当時のまま残っている操舵室。

観光客らしい中年夫婦に、なにやら説明している老人、桜井武夫（81）。

武夫「……それで、いよいよ出航の時間にな

ると、船長が号令をかけるわけです。（現

役の頃を思わせる張りのある声で）長声、

一発！……すると、港に出港の汽笛が響

くんですな」

客の女「わあ、さすがは船長さんですね」

客の男「これ、触ってみていいですか」

と、操作卓を指さして。

武夫「どうぞどうぞ。航海当時は限られた

乗員しか触れませんでしたけどね、今は

誰がどんなに触っても、船が沈むことは

ありませんから」

客の女「（笑って）確かに」

客の男「おお、すごいな、さすがは本物だ」

と、夢中になって操作している。

客の女「男の人って、いくつになっても好

きなんですよね、こういうの」

武夫「ええ、好きですねぇ」

離れたところからその姿を見ている

勇作に、武夫も気づく。

勇作、ヨツと片手をあげる。

○青函連絡船記念館摩周丸・甲板

甲板からは、函館山などの眺望が広がる。

甲板の手すりにもたれて、気持ち良さそうに風に吹かれている勇作と武夫。

武夫「そうか、恵介の先生がなあ」

勇作「わざわざ訪ねてきてよ、頭ア下げるわ、説教してくるわで……」

武夫「(面白そうに) 説教？」

勇作「ルールを守ることの大切さを子どもに教えるのも大人の役目だべやって……いや、弱ったわ(笑う)」

武夫「お前にも迷惑かけるな、ウチの孫が」  
勇作「なんも。恵介はおれにとつても孫みたいなものだ。したけど、一体どういう

つもりなんだべな」

武夫「わかんねえ。なんだかわかんねえけど、あいつなりに考えがあることなんだべ」

勇作「んだな」

武夫「呆れてんだか諦めてんだか、親もなんも言わねえし」

勇作「まあ、あのくらいの年頃は、誰がなに言っただって聞かねえよな」

武夫「まして、親や先生の言うことはな。で、どうすんだ次に来たときは」

勇作「注文通りにやってやるさ」  
武夫「断らないのか」

勇作「なして断るって？ 孫の頼みだぞ」  
武夫、微笑む。

係員が武夫を呼びにくる。

係員「船長、次のお客さん待ってます」

武夫「おお、すぐ行く」

係員「お願いします」

と、走り去る。

勇作「船長、か」

武夫「船長って呼ぶのはやめてくれって言

ったんだけどな。お客さんのウケがいい

んだとよ、そのほうが」

勇作「なんも、いいべや。本物の船長だっ

たんだから」

武夫、照れ笑いしながら去ってゆく。

見送る勇作。

小さくうなずいて、

勇作「あの」

と、マスターに声をかける。

マスター「はい」

勇作「うまいブレンドだね」

マスター「ありがとうございます。お気に

召しましたか」

勇作「ああ、召した召した」

マスター「それはどうも」

勇作「でさ、頼みがあるんだけど」

マスター「？」

### ○喫茶店・店内

目を閉じてコーヒーを飲んでる勇作。

### ○函館の街

自転車で走る勇作。

そのカゴに、紙包みが入っている。にんまりしている勇作。

○朝日理髪店・外（日替わり）

古い型のサインポールが回っている。

勇作、二人のカップにコーヒーを注ぐ。

○朝日理髪店・店内

ソファに座って談笑している常連客

の沼田と吉岡（78）。

髪を切りにではなく、ヒマをつぶし

に來ているのだ。

沼田「ユウさん、コーヒーおかわり」

と、空になったカップをひらひら。

勇作「調子に乗るなよ、金取るぞ」

沼田「このこのコーヒー、下手な喫茶店より

おいしいからね、金出しても飲みたいわ」

吉岡「そうですねえ、なんと云っても落ち

着くし」

と、コーヒーをすすつて。

憩コーナーだな」

沼田「違う違う、大人の社交の場だって」

吉岡「そうそう。その昔、床屋は地域の社

交場でもあつたんですよ」

沼田「さすが吉岡先生、なんでもよく知つてゐるね」

吉岡「大学の講義で近世の風俗史も担当してましたからね。江戸時代の髪結床は庶民の社交場でもあり、番所、つまり今の交番としての役割もあつたんですよ。開業にあたっては幕府に届け出る必要がありましたし」

沼田「へえ……髪結床がねえ」

勇作「いいよもう。江戸時代の話なんて落語と時代劇だけで十分だ」

沼田「時代劇って言えば、髻ってどうやって結ってたんかね？」

勇作「蒸し返すなって。長くなるべや」

沼田「いいべさ、どうせ客も居ねえんだし」

吉岡「最初にまずこの（と、額から頭頂部のあたりを指して）月代を剃って、次に髪をといて、髥を剃ったあとで髥を結うという段取りで……」

勇作「もういいって。髥の結び方なんて今どきなんの役にも立たねえし」

と、うんざり顔。

沼田「いやいや、相撲取りがいるべさ」

吉岡「ああそうですねえ、幕下以下の力士は丁髷を結っていますねえ。十両になる

と大銀杏が結えるようになりますが」

勇作「相撲ねえ……最近は全然見る気がしなくなつたな」

沼田「そういえばおれも昔ほど興味ねえな。昔はほら、北海道出身の相撲取りが強かつたべ」

勇作「大鵬とか北の湖とか千代の富士とかな」

沼田「やっぱり地元の出身力士が多いと応援したくなるし、それが強いとうれしいんだよな」

吉岡「今は上位がほとんど外国人力士ですからねえ」

勇作「仕方ねえべ、外国人のほうが強いんだから。実力の世界だ」

沼田「したけどなあ」

吉岡「日本が豊かになったということですかね」

勇作「豊かに？」

吉岡「大相撲は実力の世界ですから。番付が下のうちは、具なんか残ってないようなちゃんこ鍋でどんぶり飯を掻きこんで、兄弟子たちがたっぷり汗を流した後のドロドロのお風呂に入るんです。もちろん給料も出ない」

沼田「だから一日も早く強くなろうと思うんだよね」

吉岡「そう。いわゆるハングリー精神です。貧しい環境で育ったほうが上昇志向が強いのは当たり前です」

勇作「確かにな。昔に比べたら北海道もずいぶん豊かになったからな」

沼田「そうかい？　あまり実感ないけど」

吉岡「今でも首都圏と比べると北海道の平均所得はずいぶん少ないですけど、昔はもつと格差がありましたよ」

勇作「食べるもんもろくになかったからな、おれたちが子どもの頃は」

それぞれを思う三人。

沼田「相撲といえばタケさんだよ」

勇作「なんだ。相撲中継が始まるともう夢中でな」

沼田「ひいきの相撲取りが負けるともう、がつくり肩落としてさ」

勇作「優勝でもしようもんなら、大喜びして朝まで飲んでた」

吉岡「桜井さん、今でも大好きですかね相撲」  
勇作「どうだかね。北海道出身の相撲取り

がいなくなつて面白くねえつて言つてた  
からな、前に」

沼田「北海道出身の横綱なんて……もう出

ねえのかな」

勇作「出るかもしらんけど、まあ、おれた

ちが生きてるうちは無理なんでないの」

吉岡「ですよねえ」

### ○朝日理髪店・店内（日替わり）

ラジオから歌謡曲の番組が流れてい  
る。

客のいない店内で、熱心になにやら

作っている勇作。

プラモデルの戦艦（金剛）である。

工具箱には、使い込まれたニッパ

やヤスリなどが揃っている。

器用に組み立てていく勇作。

カランとドアが開く音がする。

勇作、顔を上げて見る。

入ってきたのは武夫である。

勇作「おう、タケか」

武夫「ん」

と、どこか元気がない。

勇作「どした、ヒマつぶしに来たか」

武夫「いや……」

と、近寄つて覗き込む。

武夫「なに作つてんだ今度は」

勇作「旧日本海軍高速戦艦・金剛だ」

武夫「渋いな」

勇作「そりゃ渋いべ、じじいなもの」

武夫「違いねえ」

勇作「まあ座れ。コーヒーでも入れるべ」

と、立ち上がり、片隅のコーヒーマ  
ーカーへと向かう。

勇作「店がヒマなおかげで、プラモデルと

コーヒーの腕ばかりあがるんだわ」

武夫「あ、コーヒーはいい」

勇作「遠慮すんなって。十字街の喫茶店か

ら分けてもらいたい豆があるんだ」

と、コーヒーを入れようとするが、

武夫がそれを制して。

武夫「髪、切ってもらおうべと思ってるさ」

勇作「髪？ お前十日ばかり前に切ったば

っかりだべ」

武夫「だけど……まあいいべや」

と、自分から椅子に座る。

勇作「切ってくれたってなあ……」

と、ちよつと困り顔で。

× × ×

ラジオからは、ちあきなおみの「黄  
昏のビギン」が流れている。

小気味いいハサミの音をさせて髪を  
切る勇作。

武夫「いいなア、昔の歌は」

勇作「年寄りくせえこと言うなって」

武夫「したって年寄りなもの」

急に曲が不安定になり、ノイズだら  
けになる。

勇作「なんだ、また調子悪くなってる」

武夫「いつまで使ってたんだそんなガラクタ」

勇作「失礼だな、年代物って言え」

武夫「いいかげん新しいラジオ……いやテ  
レビくらい入れたらどうだ」

勇作「床屋にはラジオって、昔から決まっ

でど」

髪を切る手を止めて、ラジオのつまみを回してみる勇作。

チューニング、なかなか安定しない。

勇作「まだくたばるには早いべ。おれより

年下のくせに」

と、ラジオをぼんぼんと叩く。

とたんに、途切れがちだった曲がな

めらかに聞こえはじめる。

武夫「お……直ったか。そう言えばずっと

見てないな、この歌手」

懐かしいメロディーにあわせて、鼻

歌をうたう武夫。

勇作、また髪を切りはじめ。

武夫「引退したんだったかな」

勇作「どうだったべな。人前はもう出な

いらしいけど」

武夫「もったいねえな、上手いのに」

黄昏のビギン。

武夫「（しみじみ）昔の機械はいいよな。叩けば直ることもあるもんな」

勇作「んだなあ」

武夫「人間も叩いて直ればいいのにな」

勇作「ん？」

武夫「（さらっと）入院することになった」

勇作「（驚く）入院？」

と、思わず手が止まる。

武夫「ああ」

勇作「どっか悪いのか？」

武夫「もう八十過ぎてんだぞ。どっかこつ

か悪いのは当たり前だべ」

勇作「したけど、入院って」

武夫「ちよつと面倒な病氣らしくてな」

勇作「手術するののか」

武夫「ああ。ここでお前に髪切ってもらう

のもこれが最後かもしれない」

勇作「医者に言われたのか」

武夫「なんとなく、な」

勇作「……」

武夫「八十一つたら平均寿命より上だべや。

惜しいこともねえさ」

勇作「いつなのよ、入院」

武夫「あさつてだ」

勇作「そうか」

武夫「お前、見舞いになんか来るなよ。気

持ち悪い」

勇作「行かねえよ」

ラジオパーソナリティーの明るい喋

り。

二人とも無言で。

### ○朝日理髪店・店内（夕方）

プラモデルの続きを作っている勇作。

手を止めて外を見る。

夕日に染まっている空。

勇作「さて、ちよつと早いども、そろそろ

店じまいするか」

と、片付けを始める。

### ○焼鳥屋（夜）

地元の人が相手の小さな焼鳥屋。

串をつまみながら、カウンターで日

本酒を飲んでいる勇作。

その思案顔。

店主「どうしたの、元気ないんでしょ」

勇作「ああ、ちよつとな」

店主「具合でも悪いのかい」

勇作「具合悪かったら飲みに来ないって」

店主「そりやそうだ」

勇作「今は治るんだべか、がんって」

店主「(驚く) え、がんなのかい朝日さん」

勇作「だからおれは具合悪くないって」

店主「ならいいけど、じゃ誰の話さ」

勇作「うーん、がんと決まったわけでもな

いんだけどな」

店主「まあ、治るかどうかは種類にもよる

らしいけど。ウチのお客さんにも何人も

いるよ、がんが治った人」

勇作「そうかい」

店主「誰の話かは知らないけど、まずは信

じることだね」

勇作「信じる？」

店主「そう、絶対に治るって。病は気から

って言うべさ」

勇作「……なるほどね」

### ○ストリートファッション雑誌

街角でポーズを決めているモデル、

シルバークレイのショートカット。

勇作の声「これが？」

### ○朝日理髪店・店内(日替わり)

雑誌を広げてうなづく恵介。

伸びてボサボサになった髪。

勇作「これがいいのか」

恵介「うん」

勇作「白髪だべや」

恵介「違うよ」

勇作「なしてわざわざ白髪にするかね、若

いのに。そのうち嫌でも白くなってくる

ぞ」

恵介「だから白髪でないって。シルバーグ

レイだ」

勇作「シルバー……ふうん、銀髪か。そう

言えば昔、フレッド・ブラッシーってプ

ロレスラーがいたな」

恵介「プロレスラー？」

勇作「ああ。銀髪鬼って呼ばれてた」

恵介「強かった？」

勇作「うーん、どうだべな。反則ばかり

の悪役レスラーだったから」

恵介「なんだ、悪役か」

勇作「バカお前、悪役は大事だぞ。悪役が

いるから善玉が引き立つんだ」

恵介「そんなもんかな」

勇作「お前は……悪役タイプだな」

恵介「ふん、どうせ悪役顔だよおれは」

勇作「(笑って) 違うって。善玉なんてバカ

でもできるけど、悪役は利口じゃなきや

つとまらねえんだ。お前は賢いからいい

悪役になれるぞ」

恵介、思わず照れる。

勇作「体もこれからまだまだ大きくなるべ

し、冗談抜きにプロレスラーでも目指し

てみたらどうだ？」

と、恵介の肩をポンと叩いて。

恵介「(なぜか焦って) もう、なんでもいい

から早くやってよ」

と、椅子に座る。

残される恵介。

勇作「わかったわかった」

と準備をはじめ。

### ○ドラッグストア・店内

勇作「しかし……ウチにそんな色……あつ

ヘアカラー売場で腕組みをしている

たべか」

勇作。

ごそごそと棚を探す勇作。

勇作「……(どれだ?)」

勇作「(ぶつぶつと) 白髪染めだったらいろ

たくさんの種類のヘアカラーを前に、

んな色があるんだどもな……白髪に染め

難しい顔の勇作。

るってのは……」

女性の店員が恐る恐る声をかける。

恵介「だから白髪でなくてシルバーグレイ

店員「お客様、なにかお探しで？」

だって」

勇作「白髪……でなくて、なんだっけ。あ

勇作「やっぱりないわ。別の色でいいか？」

の、そうだ、シルバーグレイに染めるやつ、

恵介「嫌だよ」

どれだべ？」

勇作「仕方ねえなあ、ちよつと待ってれ」

店員「シルバーグレイ？ 失礼ですが、お

と、店を出て行く。

お客様がお使いに？」

恵介「あ、ちよつと……」

勇作「(まじまじと店員を見て) あんた、面

白いこと言うなア」

○朝日理髪店・店内

老眼鏡で、市販のヘアカラーの細かい注意書きを読む勇作。

勇作「ふん、簡単だな。こつたらもん、わざわざウチさ来なくても一人でも染められるんでないのか」

恵介「自分でやるなんておつかなくて。おれが不器用なの知ってるべさ」

勇作「タケに似てなア」

と、ヘアカラーを使い始める。

恵介「それに……自分でやったら、この店の売り上げにもなんないし」

勇作「そりゃ有り難いこつた」

恵介「へへっ」

勇作「(ついでのように) ところで恵介よ」

恵介「え？」

勇作「どうだ？ タケの具合は」

恵介「うん……手術はうまくいったらしいけど、ちょっと転移してるみたいなんだ  
つて」

勇作「転移か……」

恵介「今は抗がん剤を使ってるんだけど」

勇作「……そうか」

恵介「行ってやればいいのに、見舞い」

勇作「したって来るなって言われたもの」

恵介「言われても行けばいいべさ、友達だもの」

勇作「タケだって、弱つてるとこ見られたくないべ」

恵介「そうでもないよ。痩せてもないし」

勇作「そうか」

恵介「この前の日曜日にも行ってきたんだ、病院。元気だったよ」

勇作「……」

### ○漁火通（早朝）

気持ちいい海沿いの道。

トレーニングウェアで、潮風に吹か

れながらランニングしている恵介。

シルバーグレイの髪の毛が朝日にキ

ラキラと輝く。

荒い息づかい。

ジョギングではなく、足腰を鍛える

ための走り込みといった感じ。

### ○啄木小公園（早朝）

函館山を望む小さな公園。

スクワットをしている恵介。

× × ×

水飲み場でごくごくくと水を飲む恵介。

腕で口を拭って、また走り出す。

### ○中学校・外観

まどかの声「桜井くんッ！」

### ○中学校・教室

シルバーグレイの髪で立っている恵

介。

クラスメイトたち、にやにやしてい

る。

真っ赤な顔のまどか。

まどか「あなた……またこんな髪型に……」

恵介「すみません」

まどか「どういうつもり？」

恵介「すみません」

まどか「もつとちゃんと考えなさいよ！

自分の進路」

恵介「……」

まどか「こんなバカなことしてて、行きた

い高校に行けなくなったらどうするのよ」

恵介「……」

まどか「もつたいたいじゃない……あんな

に……（次第に涙声になる）あんなにき

ちんと勉強してるのに……こんなことで

台無しになったら……」

こらえきれなくなつて、とうとう泣

き出してしまふまどか。

ざわつく教室。

意外な展開に困惑する恵介。

### ○朝日理髪店・店内（夕方）

神妙な顔で椅子に座っている、シル

バーグレイの恵介。

勇作「そうか、泣かれたか」

恵介「うん……驚いた」

勇作「いい先生だな」

恵介「うん。おつちよこちよいだし思い込

み激しいけど」

勇作「気は済んだか？」

恵介「……」

勇作「赤くしたり白くしたり黒に戻したり、

あまりやりすぎると髪の毛も痛むし、頭

の皮膚にもよくないぞ。ハゲるのは嫌だ

べ？」

恵介「そりゃ嫌だよ」

勇作「まあ、最近はいいカツラもあるからな。

ハゲでも大丈夫かもしらんけど」

恵介「いや、ハゲるのは困るんだ」

勇作「困る？」

恵介「うん、ハゲられないんだ絶対」

勇作「どういうことよ」

恵介、少し逡巡するが、

恵介「(意を決して) 朝日のじいちゃん」

勇作「なによ」

恵介「口は堅いよな」

勇作「おう、床屋は口が堅いんだ。黙って

てほしいことは墓場まで持って行ってや

る」

恵介「いやあの、そこまでの話じゃないん

だけど」

勇作「そうか。で、どんな話だ」

恵介「あのさ、まだ誰さも言ってねえんだ

けど……」

× × ×

鏡の中の恵介、黒髪に戻っている。

恵介「誰さも言わないでよ」

勇作「言わねえって……したけど」

恵介「なに」

勇作「別に内緒にしておかねばならねえこ

とでもねえべ。タケの野郎きつと喜ぶぞ」

恵介「じいちゃんにも言わねえだよ」

勇作「いいべや、自分がやりたいって決め

たことなんだから」

恵介「まだ言いたくねえんだ」

勇作「なして」

恵介「正直……まだ迷ってるし」

勇作「迷ってる？」

恵介「自分では決めたつもりでも、怖くな

ってやめたくなくなるかもしれないし」

勇作「怖いなんて、当たり前だべそんなの。

知らない世界に飛び込もうってんだ。誰

だって不安ださ」

恵介「そうかな」

勇作「親にも言っていないのか」

恵介「親はいいんだ、兄貴と妹さえいれば。

おれのことなんて興味ないし、家を出て

くれれば清々するだろうさ」

勇作「そつたら寂しいこと言うなって」

恵介「本当のことだもの」

勇作「……」

恵介「じいちゃんだけだよ、ウチでおれの

味方してくれるのは」

間。

勇作「……それでも、ちゃんと話しなきゃ

ダメだぞ、親とは」

恵介「うん、わかってる。反対されても聞

かないけど」

勇作「でもまあ……心配いらねえさ、大丈

夫だ」

恵介「大丈夫？」

勇作「怖くなるかも、やめるかもって思う

のは、自分の弱さをちゃんとわかってる

ってことだ。弱さを知ってる奴は強くな

れる」

恵介「……」

勇作「だから大丈夫だ、お前ならうまくや

れるって。おれが保証する」

と、黒くなった恵介の頭をポンと叩く。

恵介、照れくさそうに椅子から下り、店内を眺める。

恵介「また増えたんだね、プラモデル」

勇作「ああ、店がヒマなもんでな」

恵介、船のプラモデルをひとつ手に取る。

恵介「なあ、朝日のじいちゃん」

勇作、床を掃除しながら、

恵介「ん？」

恵介「本当は船に乗りたかったんだべ」

勇作、掃除の手が一瞬止まる。

勇作「うーん、どうだったのかな」

と、また掃除を始めて。

恵介「国鉄の採用試験で、学校推薦の枠に

うちのじいちゃんと朝日のじいちゃんと二人残って、だけど朝日のじいちゃんが辞退したって」

勇作「聞いたのか、タケに」

恵介「うん」

勇作「舌打ち」くだらねえこと話すなよ孫に」

恵介「じいちゃん言ってたよ。勇作のほうがいい成績も良かったって。だから本当は諦めてたんだって」

勇作「……」

恵介「なんでゆずったのさ、夢だったのに」

勇作「……夢か」

飾られた中から、戦艦のプラモデルを手に取る勇作。

勇作「ほら、これなんてよく出来てるべ」

恵介「うん」

勇作「手先が器用だったんだよな、おれは」

恵介「え？」

勇作「だから、親の後を継いで床屋になってもやっていけると思つてよ。だけどタケの野郎は、ほかににも出来そうになかつたからな」

恵介「(苦笑) ひどいね」

勇作「だけどあいつ、連絡船に乗りたいて気持ちちは誰よりも強かつた。本当に好きな仕事なら、どんな辛いことがあつても頑張れるからな。だからおれよりタケのほうが船員に向いてる、そう思った」

恵介「本当にそれでよかつたのかい、後悔はしてないの？」

勇作「してるよ」

恵介「やつぱり」

勇作「後悔はするんだよ、どんな道を選んだとしてもな。あのときああしてればよかつたかも……つて。でもそれが人生だ。後悔しながら、それでも前さ向いて進むしかないのさ」

恵介「……」

勇作「おれがもし連絡船に乗つてたとしても、きつと後悔してたべな。親の後を継いでやればよかつたつて」

恵介「……そういうもんかな」

勇作「そういうもんだ。年寄りの言うことだぞ、説得力あるべ？」

恵介「ねえ、朝日のじいちゃん」  
勇作「なによ」

恵介「床屋の仕事は好き？」

勇作「まあな、手先が器用だし、我ながらセンスも悪くないし、おれの性には合ってたと思うけど。毎日いろんな客が来るから退屈しないしな」

### ○朝日理髪店・店内（回想）

常連客たちの髪を切る勇作。

笑い話、深刻な話、あれこれ話しながら。

そのシーンを積み重ねて。

勇作の声「みんなこの椅子さ座っているんな話をしていくのさ、ここだけの話つてやつをな。だから床屋は口が堅くなきやダメなんだ。おれが誰さも言わないつてのがわかってるから、みんな安心して心配事だの悩み事だの話すんだ」

深刻そうな顔の客にアドバイスしている勇作。

散髪が終わってパッとカットクロスをとると、客の顔が穏やかになっていく。

勇作の声「王様の耳はロバの耳つて昔話があるべ。床屋は客の秘密を喋らないつてのは、昔も今も世界中変わらないつてこつた」

### ○朝日理髪店・店内（夕方）

恵介「だけどあの話、結局秘密を黙つていられなくなるんでなかったかい、床屋が」

勇作「そうか？」

カランと音がしてドアが開き、

まどか「ごめんくださいッ」

と、腹立ち顔で入ってくる。

三人「あつ」

なんとなく気まずい空気。

まどか「……あの」

勇作「ごめんね先生、頼まれたのにさ。したけどほらこの通り、すぐに黒く戻したから。こいつもこの変な髪型にするには、それなりのわけがあつて」

恵介「ちよつと、朝日のじいちゃん！」

勇作「言わねえよ。言わねえけど、ただおもしろがつてやってるんでないって、それだけわかつてやってけれ。あんたを泣かしたことも悪かったと思ってるし、したからすぐに来て黒く戻したんだから。それにたぶん、こんな髪型にするのも今回が最後だから……（恵介に）なあ」

恵介、少し考えてからうなずく。

勇作「ほらこの通り、今回のことは謝ります」

と、恵介に頭を下げさせて、

勇作「（頭を下げる）申しわけない」

抗議に来たまどか、機先を制されてしまつて困惑顔。

### ○病院・がん病棟（日替わり）

手みやげが入っているらしいビニール袋を手に、ナースセンターでなか尋ねている勇作。

礼をして病室を探しはじめる。

### ○病室・入口

四人部屋に三枚のネームプレート。その中のひとつ「桜井武夫殿」。

見ている勇作。

○病室・中

窓際のベッドで、ぼんやりと外を見ている武夫。

近づいてくる勇作には気づかない。

勇作「よお」

ちよつと驚いたように勇作を見る武

夫。

武夫「なした、なにしに来た」

勇作「(苦笑)なにしに来たとはご挨拶だな。

近くまで来たもんでよ、久しぶりに顔で

も見せてやるべと思つてな」

武夫「あまり見たくもねえ顔だけどな」

勇作「そんな口がきけりや上等だ」

と、手みやげを渡す。

武夫「氣イ使うなよ馬鹿」

と、受け取つて中を見る。

高級そうなカップアイスがいっぱい

入っている。

武夫「なんだこれ」

勇作「好きだったべや甘いもん」

武夫「(困惑)だども、こんなにいっぱい」

勇作「遠慮しねえで毎日少しずつ食え」

武夫「溶けるべや」

勇作「冷蔵庫、あるつて聞いたぞ」

武夫「冷蔵庫はあるけど、冷凍庫はない」

勇作「え」

武夫「どうすれつてよ、こんなにいっぱい」

顔を見合わせる二人。

○病院・がん病棟

ナースセンターで頭を下げている勇作。

看護師にビニール袋を差し出す。

○がん病棟・談話室

アイスを食べている勇作と武夫。

勇作「差し入れは受け取れませんって、最近の病院は固いんだな」

武夫「知らなかったのか」

勇作「溶けるともつたいないから、そこを

なんとかって頼み込んだわ」

武夫「こんな怖そうなじいさんに頼まれたら、さすがの渡辺主任も断れないべな」

勇作「おっかあが入院してた頃は、もっとゆるい感じだったもな」

武夫「何年前の話だ」

勇作「十三回忌がおととしだったからな、それくらい前の話だ」

武夫「そんなになるか、妙子さんもがんだったもんな」

勇作「ああ……進行が早い乳がんだな、あつという間に男やもめの出来上がりだ」

武夫「そうだったな」

勇作「一人暮らしには慣れたけど、今でもたまに口に出ることがあつてな」

武夫「？」

勇作「(妻に訊ねる口調で) おい、あれどこさやつた？」

武夫「(笑って) そりゃおれも同じだ」

勇作「だけど、お前の場合誰かが応えてくれるんでないか。息子夫婦と孫たちと

武夫「？」

武夫「(笑って) そりゃおれも同じだ」

勇作「だけど、お前の場合誰かが応えてくれるんでないか。息子夫婦と孫たちと

武夫「？」

武夫「(笑って) そりゃおれも同じだ」

勇作「おっかあが入院してた頃は、もっとゆるい感じだったもな」

一緒に住んでるんだから」

武夫「家族なんて、いたらいたで面倒くさいもんだぞ」

勇作「したけど、こういう時には心配してくれるべや」

武夫「……まあな」

間。

勇作「で、どうなのよ」

武夫「どうやら転移してるらしくてな、今は抗がん剤治療だ」

勇作「治るのか」

武夫「さあな。そのために苦しい治療してるんだともな」

勇作「治療は辛いのか、やっぱり、」

武夫「一時期よりはだいぶまりましたけどな。

今日もずいぶん調子いいから、こんなの

も食えるし」

と、空になったカップを見て。

武夫「それでもやっぱり、ゆるくない時はな……ひどい吐き気がするわ体中が痛むわ」

勇作「そうか」

武夫「こんな大変な治療なんてやめて、早くばあさんのとこさ行きたい気もするし、もうちよつとこの世にいたいような気もするし……」

勇作「どう思ってたって、そのうち嫌でも来るべや、お迎えなんて」

武夫「この歳になってがん治療なんてな……なんかジタバタしててカッコ悪いべ」

勇作「いざって時にはジタバタするさ、人間だもの」

武夫「恵介のことも気がかりだな」

勇作「……」

武夫「おれが死んだら……頼むな。相談と

か乗ってやってけれ。あいつ親とうまく

いってねえんだ」

勇作「そうみたいだな」

武夫「だから心配でな」

勇作「それなら大丈夫だ。すでにおれはお

前より頼りにされてるぞ、恵介に」

武夫「え」

勇作「お前には言っていない話も聞かされた」

武夫「なんだよ」

勇作「教えねえ。知りたきゃ長生きしろ」

部屋中にプラモデルが飾ってある。

戦艦や空母、帆船など、船ばかり。

一人のテーブルで、新聞に目をやり

ながら、コーヒーとトーストの簡単

な朝食をとっている勇作。

勇作「(食べながらモソモソと) なんだ、昨

日から相撲はじまったのか。知らなか

った」

と、コーヒーカップに右手を伸ばす。

取手を持つとうとした指がすべって、

カップを倒してしまい、コーヒーが

テーブルにこぼれる。

勇作「あつ、なにやってんだおれ」

あわてて布巾でテーブルを拭く勇作。

勇作「やれやれ……注意力散漫だ。おっか

あが生きてたら怒られるとこだった」

### ○朝日理髪店・リビング(朝)

店の奥にあるリビング。

壁にかけられた小さな額の写真。

すでに亡くなつた妻の笑顔。

○朝日理髪店・店内

遠藤の声「あ痛っ」

常連客の遠藤の頬が切れて、うすく血が出ている。

勇作「あつ……」

驚いて思わず剃刀を落とす勇作。

勇作「大丈夫かい遠藤さん」

遠藤「ん、ちよつと切れたべかな」

勇作「すいません」

と、見ると椅子に座っているのは別の常連客・清水である。

清水「大したことねえよ」

勇作「ごめんね清水さん、すぐ薬塗るから」

と、あわてて救急箱を取りに行く。

清水「(からかうように) どしたア大将、手でもすべつたのか」

勇作「いやいや、ほんと申しわけない」

と、蒸しタオルで頬を拭き、軟膏を塗ろうとすると、別の常連客・坪田に変わっている。

坪田「(ニヤニヤ) 困るなア、この男前さ傷

なんかつけてくれちゃつてよオ」

勇作「(焦つて) あはは、ぐつと渋みが増し

たつて坪田さん」

坪田「男の傷は勲章だつてか(笑う)」

勇作「それが床屋の剃刀の傷つてのが心苦しいけど」

と、申しわけなさそうに苦笑いしながら、自分の右手を見つめる勇作。

○朝日理髪店・店内（夜）

昔ながらの革砥で剃刀を研いでいる

勇作。

研いだ剃刀を握って、客の顔を剃る

ような動作を試してみる。

首をかしげながら何度か繰り返す。

やがて——剃刀を置いて、深いため

息。

○朝日理髪店・外（翌日）

「都合により休みます」の張り紙。

○函館湾・ヨットハーバー

停泊しているヨット。

ぼんやり眺めている勇作。

女医の声「……レントゲンで見る限り、こ

れといった異常はありませんが」

○病院・整形外科の診察室（回想）

レントゲン写真を指しながら、勇作

に説明している中年の女医。

女医「神経系統になんらかの障害があるの

かもしれません」

勇作「神経に？」

女医「精密検査をしてみないとなんとも言

えませんが、身体と同じように神経も歳

をとりますから、反応速度や作業能率が

低下するのは避けられないんです」

勇作「歳のせいってことは、どうもならな

いってことですか」

女医「いえ、歳のせいと決まったわけでも

ありませんから。ですけど……精密な作

業はもう難しいかもしれない」

勇作「(息をのむ) それじゃ、剃刀を持つのは……」

女医「怪我の程度はごく軽いとはいえ、この一週間で三件の事故というのは……剃

刀を扱うのは、もうやめたほうが」

勇作「ちょっと待ってけれ、なんとかなん

ねえのかい」

女医「ですから、原因がはつきりしないと」

勇作「頼むよ、手先が器用なのだけが自慢

なんだ」

女医「お気持ちはわかりますが」

勇作「……」

女医「まあ、あまり深刻に受け止めない方

がいいと思いますよ。なにかのストレス

が原因となっていることも考えられます

から」

勇作「ストレス? おれが?」

女医「自分では気がつかないという場合も

多いんです、ストレスは。休養すること

で良くなるというケースもありますし」

勇作「(つぶやく) ……病は気から、か」

女医「えっ」

勇作「……いや、なんでも」

女医「しばらく様子を見てみてはいかがで

すか。もしご希望であれば心療内科もご

紹介できますが」

勇作「……」

### ○青函連絡船記念館摩周丸・外観

武夫の姿がないことは知っているが、

つい来てしまった勇作。

○青函連絡船記念館摩周丸・操舵室

別の青函連絡船OBが、得意げな顔で観光客にあれこれ解説している。寂しそうに見ている勇作。

恵介、何かを決意したような顔で、

進路調査票を前の生徒に手渡す。

× × ×

にぎやかな休み時間。

○青函連絡船記念館摩周丸・甲板

甲板の手すりにもたれて、ぼんやり海を見ている勇作。

男子生徒B「だな、選択肢が少なすぎる」

おだやかな波に叩かれる船体。

男子生徒C「あーあ、いつそ高校行くのな

勇作「……そろそろ潮時かね」

んてやめるかなおれ。勉強なんてこれ以上したくねえし」

○中学校・教室（日替わり）

ホームルームの最中。

男子生徒B「バカ、今の時代高校、いや大

まどか「それじゃ、先週配った進路調査票、

学くらい出しておかないと話になんないべ

集めまーす。裏返しにして、列ごとに後

と、恵介の肩をポンと叩く。

ろの席から前へ送って」

恵介「ん……ああ」

男子生徒 A 「(男子生徒 C に) 高校行かない

でどうすんのよ、働くのか」

男子生徒 C 「プータローとかニートとか」

男子生徒 A 「そういうのは経済的に余裕の

ある家でないと無理だぞ」

男子生徒 C 「厳しいなあ……」

男子生徒 B 「とりあえず素直にどっかの高

校さ入っとけて話だ」

男子生徒 A 「恵介はいいよな、だいたいど

この高校でも行けるべ」

男子生徒 B 「(うなずいて) だな、選択肢が

多い。うらやましい」

ニコニコしている恵介。

いるまどか。

パラパラとめくっていた手が止まる。

思わぬものを見つけた驚きの表情。

横を通りかかった志賀が声をかける。

志賀 「どうしたの、そんな恐い顔して」

まどか 「志賀先生、これってどう思います？」

と、一枚の進路調査票を見せる。

志賀、怪訝そうに受け取って読む。

まどか 「からかかってるんでしょうか」

志賀 「(思案して) うーん、ふざけてるのか

現実逃避か、まさか本気なのか」

まどか 「なにを考えてるんだらう……わか

らない、本当に」

志賀 「うん、わかんないね相変わらず」

頭を抱えるまどか。

志賀 「聞いてみるしかないね、本人に」

## ○中学校・職員室

机に座って進路調査票に目を通して

## ○中学校・生活指導室

恵介と向かい合って座っているまどか。

まどか「ねえ桜井くん」

恵介「はい」

まどか「進路調査票はまじめに書いてほしいんだけど」

恵介「書きました」

まどか「まじめに？」

恵介「はい」

まどか「嘘でしょう？」

恵介「いえ」

まどか「じゃあこれ、本気で書いたわけ」と、机に進路調査票を叩きつける。

## ○進路調査票

汚いが、力強い字で恵介のクラスと出席番号、名前が書かれている。

第三希望までである進路記入欄、その第一希望の欄に大きく「大相撲力士」とだけ書いてある。

## ○中学校・生活指導室

まどか「どういうことなの、いったい」

恵介「そこに書いてある通りです」

まどか「高校には行かないの」

恵介「行きません」

まどか「相撲部のある高校に入って、それからでもいいじゃない」

恵介「いや、もう決めたんで」

まどか「ご両親は？ お父さんやお母さん

はなんて言ってるの？」

恵介「お前の好きにしろって」

まどか「本当に？」

恵介「はい。だからおれ、相撲取りになり

ます」

と、立ち上がるうとする。

まどか「(制して) ちょっと待ちなさい。あ

なたの将来の話なのよ」

恵介「夢だったんです。小さい頃からの」

まどか「夢？ お相撲さんが？」

恵介「(うなずいて) じいちゃんとおれの、

夢なんです」

そう言い残して出て行く恵介。

机上の進路調査票を見つめるまどか。

### ○病室・中(日替わり)

窓際のベッドで点滴を打たれている

武夫。

その隣に、恵介が立っている。

恵介の目を見て、小さくうなずく武

夫。

恵介、大きくうなずいて。

### ○朝日理髪店・外(日替わり)

「都合によりしばらく休みます」の張

り紙。

店の前に立ってそれを見ているまど

か。

背後から近寄る人影。

沼田の声「もう半月以上開いてないよ、こ

の店」

驚いて振り向くまどか。

○朝日理髪店・店内

その顔を見て沼田もびっくり。

ソファに座っている三人。

沼田「あ、クレーマー！」

勇作だけが買ってきたコーヒーをす

まどか「クレーマー なんですかそれ！」

すっている。

沼田「いや、そう聞いたから」

沼田「ユウさん」

まどか「失礼な！ お願いはしたけどクレ

勇作「(飲みながら) なによ」

ームはつけてません」

沼田「自慢のコーヒーは？」

沼田「そうなの？」

勇作「あいにく豆、切らしてる」

などと店先でやりあっている二人。

沼田「(がっかり) そう」

そこへ、コンビニのコーヒー紙コッ

勇作「で、なにしに来た？ ふたりとも」

プを手に帰ってきた勇作。

沼田「(憤慨) なにしにって、髪切りに来た

勇作「人の店の前でなにやってんだ、あんな

に決まってるべき。そろそろ開いてるん

たたち」

でないかと思つて来たのに」

まどか「あ」

勇作「コーヒーが目当てみたいに言つてた

沼田「ユウさん」

べや今」

妙なスリーショット。

沼田「まあ……それもあるけどね」

まどか「あの、どうして店を休まれてるんですか？」

勇作「書いてあるべ、都合によりって」

まどか「都合って？」

勇作「それはその……」

まどか「もしかして体調が良くないとか？」

勇作「(痛いところを突かれた)うるせえな、

ここはおれの店だ。開けるも閉めるもお

れの勝手だべ」

沼田「そりゃそうだけどさ、客の都合も考

ええてくれねば困るって」

勇作「床屋なんてほかに腐るほどあるべ。

どこさでも行けばいいべや」

沼田「したけどさ、もう何十年もここで髪

切ってもらって、ほかの床屋なんて行っ

たことねえからな」

勇作「なに子供みてえなこと言ってるんだ」

沼田「したけどさ、やっぱり慣れた店だな

いと……」

勇作「おれだっていつ死んでもおかしくね

え歳なんだぞ。ある日ポツクリ逝ったら

それで終わりだべ、朝日理髪店は」

まどか「やっぱり！ どこか悪いんですね。

大丈夫ですか」

勇作「だからうるせえって！ 死ぬような

話でないから放つといてけれ」

沼田「死なないけどどつか悪いんだ」

勇作「……」

まどか「大丈夫ですか？」

勇作「(話題を変える)ところで先生、あん

たはなにしに来たのさ。まさか髪切りに

きたのか？」

まどか「まさか」

勇作「だべな。恵介のことか？」

まどか「はい。今日はお詫びに来ました」

勇作「お詫び？」

沼田「ストーカーしてたことだべ」

まどか「ストーカー」

沼田「間違った。クレマーだった」

まどか「それも違うッ」

勇作「(ため息) 沼田さん、ちょっと黙って

てくれ。話が全然進まない」

沼田「(面白くない) ……」

まどか「桜井くんから聞いてたんですね、

彼の進路のこと」

勇作「まあ……最初から知ってたわけでは

ないけども」

まどか「桜井くんが、校則に違反してまで

あんな髪型にしたがった理由も」

勇作「聞かされたよ。相撲取りになつたら

もう好きな髪型にはできない、だから今

のうちにいろいろ試しておきたかったん

だつてな」

沼田「相撲取り!? タケさんの孫が(まく

したてる) ああ、そういえばいい体して

たもんな。筋肉質だから、アンコ型でな

くソツプ型つてやつだよな。へえ……相

撲取りか、いや楽しみだな。で、どこさ

入門するのさ、どこの部屋さ」

まどか「あの、沼田さん」

沼田「はい？」

まどか「お願いですからちょっと静かにし

ていただけませんか」

沼田「(しょぼん) ……」

まどか「あの髪型には彼なりの理由があったという事です。私たち教師がそれを悟ってあげていけば、もっと別の対処方法があったと思います。一方的にクレームをつけるような形になってしまい、その節は大変失礼しました」

と、頭を下げるまどか。

沼田「(小声で)……やっぱしクレーマーだべや」

勇作とまどか、沼田を無視して。

勇作「あの理由を悟るってのは無理でないの。おれも聞かされたとき驚いたし」

まどか「(身を乗り出す)それなんです。今まで聞かされなかったということがまた問題で。私が担任としてまったく信頼されていなかったということですから」

勇作「いや、信頼してる、してないの話でないね。男としてのプライドの問題さ」

まどか「プライド?」

勇作「おれが話を聞いた時もまだ迷ってたんだ恵介は。もしかしたらやめるかもしれないってな。でも男が一度やると決めたら、それを無かったことにすることはできないべ」

まどか「そんな大げさな。直前まで迷って進路を変えるなんてよくあることですよ」

勇作「この高校を諦めてあの高校を受ける、とかいうのとは話が違うべさ。大相撲ってのは力と力が真正面からぶつかり合う世界だ。そこさ挑戦するって言うておいて、やっぱりやめましたってのは、闘う前に負けを認めるようなもんだからな」

まどか、今ひとつ納得できない顔で。

まどか「そういうものなんですか、男のプライドって」

勇作「くだらないと思うべ？」

まどか「正直、そう思います」

勇作「(笑って) くだらないんだよ、それが男つてやつだ。なあ沼田さん」

沼田「(聞いていなかったがあわてて) うん、

そうだよ」

まどか「……」

勇作「これから厳しい実力の世界に飛び込むんだ。決心するにも時間がかかったのさ。あんなおかしな髪型にしながら、少しずつ気持ちを固めていったんだべさ」

まどか「それで……いよいよ決めたよ」

沼田「タケさんが入院したのも大きかった

んでないの？」

勇作「ああ。恵介は小さい頃からじいちゃんっ子でな、よくタケのひざの上に乗って一緒に相撲見てたんだ」

### ○桜井家(十数年前・回想)

武夫のひざに乗って相撲中継を見ている、幼い日の恵介。

武夫「……優勝はまた朝青龍か」

幼い恵介「うん、強いもん」

武夫「んだなあ……したけどじいちゃん、日本人の横綱も応援したいな」

幼い恵介「なして？」

武夫「相撲は日本の国技だからな、やっぱり日本人に頑張ってもらわねばさ」

幼い恵介「こくぎ？」

武夫「(笑って) 恵介にはまだ難しいか」

幼い恵介「したらさ、おれがなるよ」

武夫「なるって?」

幼い恵介「横綱にさ。したらじいちゃん応援

援してくれるんだべ?」

武夫「おお、恵介が横綱になるってか。し

たらじいちゃん、毎日応援に行かねばな」

幼い恵介「うん、なるなる!」

楽しそうに笑う二人。

### ○朝日理髪店・店内

勇作「病院で約束したってよ。絶対に横綱

になるって」

沼田「横綱! はあ……大きく出たな」

勇作「なに言ってるのよ、やるならってっぺ

ん目指さなくてどうするよ」

まどか「横綱……」

勇作「そういうわけだから、先生も応援し

てやってけれ」

まどか「私としてはやっぱり、高校には行

っておいた方がいいと思うんですが」

沼田「まあ、担任としては当たり前だべな」

勇作「生徒の本気の夢を応援してやるのも、

担任のつとめでないのかい」

まどか「……」

勇作「ま、応援しないまでも、黙って見て

てやるだけでもいいと思うけどな」

まどか「……そうですね」

と、立ち上がり、

まどか「お店、お休みのところお邪魔しま

した。失礼します」

と、一礼して店を出ようとするが、

振り返って一言。

くる。

まどか「お体、どうぞお大事に」

出て行くまどか。

店主「お、いらっしやい吉岡先生。久しぶりだね」

勇作「……」

ちらりと見る勇作。

### ○焼鳥屋（夜）

吉岡「(店主に) いやいや、すっかりご無沙

汰してしまつて…… (勇作に) 隣、よろ

カウンターで、お猪口に手をかけた

しいですか」

ままぼんやりしている勇作。

と、勇作の隣の席に座る。

串には手をつけていない。

勇作「こりや珍しい顔だ」

店主「あつたかいうちに食べてよ。冷める

吉岡「ずいぶん店が閉まつたままなので、

とうまくないよ」

ちよつと心配になりましたね。(店主に)

勇作「……ああ」

ビールお願いします。あとはお任せで五

店主「具合でも悪いのかい」

本ばかり」

勇作「具合悪かったら飲みに来ないって」

勇作「それにしてもよくわかつたね。ここ」

店主「(考えて)前にもしたべか、こんな会話」

吉岡「桜井さんに聞いたたら、夜はここに来

ガラガラと戸が開き、吉岡が入つて

てるかもしれないと」

勇作「タケに？」

吉岡「今日、ちよつと寄つたんですよ病院。

元気そうでしたよ」

勇作「元気なら退院してくるべさ」

吉岡「元気そう、と元気は違います」

店主「はいよ、とりあえずビール」

と、瓶ビールとグラスを出す。

勇作「細かいね相変わらず」

と、コップに注いで。

吉岡「こりやどうも」

と、コップを持ち上げて飲む。

吉岡「入院した当時はかなり弱気になつて

ましたけどね、今は病気を治そうという

気力に満ちている」

勇作「そうかい」

吉岡「恵介くんが大銀杏を結う姿が見たい

そうですよ。それに」

勇作「それに？」

吉岡「連絡船記念館の船長に復帰したいん

だそうです」

○青函連絡船記念館摩周丸・操舵室（回想）

観光客に、笑顔であれこれ解説して

いる武夫。

自信に満ちたその表情。

吉岡の声「桜井さんの解説は上手でしたか

らね、フアンのお客さんも多いみたいで。

また聞きたいという声がたくさん寄せら

れたそうですよ」

○焼鳥屋（夜）

酒を一口飲む勇作。

勇作「名船長だったからな、タケは」

吉岡「誰かに必要とされると、人間は力を発揮できるものです」

勇作「……」

吉岡「朝日さんですよ」

勇作「……」

吉岡「事情は知りませんが、待つてる人たちがいるんですから。早く店を開けてもらわないと」

勇作「そんなことないべさ、床屋なんてほかにいくらでもある」

吉岡「そうですね、でも朝日理髪店はたった一軒しかありません」

勇作「そう言ってもらえるのはありがたいけど、前から決めてたんだ。手先が思うように動かせなくなったら辞めようって

な。ここらが潮時だ」

吉岡「そうですか」

飲む二人。

吉岡「残念ながら、それは間違いですよ」

勇作「間違い？」

吉岡「潮時は、もともと漁師たちが使ってた言葉です。漁に出るのに一番良い潮の状況という、本来はそういう意味なんです。店を閉めるという意味で使ったのなら間違いです」

勇作「(恥ずかしい)いいって、本当の意味なんか」

吉岡「私も今が潮時だと思いますよ、朝日さんの」

勇作「どういうことだい」

吉岡「手先が思うように動かないなら、出

来ることだけやればいいんです。我々年寄りはそのくらいでいい。そろそろ考え方を変える潮時です」

勇作「いいよ先生、説教は。学生じゃないんだから……（店主に）帰るわ。つけといて」

と席を立つ。

店主「ああ、毎度」

無言で店を出ようする勇作に、

吉岡「待ってますよ」

勇作、一瞬立ち止まるが、振り返らずにそのまま店を出る。

店主「怒ったのかね？」

吉岡、微笑して首を振り、

吉岡「素直ではありませんからね、年寄りは」

### ○朝日理髪店・リビング（夜）

勇作「出来ることだけ……か」

と、壁にかけられた亡き妻の写真を  
見て。

勇作「なんかここんどこ、先生つてひとた  
ちに説教されてばかりだぞ……おっか  
あ」

### ○朝日理髪店・外（朝）

朝日に光る『朝日理髪店』の看板。

### ○朝日理髪店・店内（朝）

古いカットウィッグにハサミを入れ  
ている勇作。

その真剣な顔に、だんだん自信の色  
が満ちてくる。

○病院・外観（日替わり）

勇作の声「大丈夫なのか」

勇作「そうか」

歩く二人。

武夫「で、お前はどのようなのよ」

勇作「ん？」

武夫「ずっと店閉めてんだべ、なにがあつ

たか知らねえけど」

勇作「ああ、ちよつとな。大したことでねえ」

武夫「なんだ」

勇作「なんも。剃刀が持てなくなったただけだ」

武夫「（驚く）剃刀が？」

と、思わず立ち止まる。

勇作「手先が器用なことには自信があつた

どもな、剃刀が上手く使えなくなった」

武夫「原因は？」

勇作「さあ、わかんねえ。歳のせいだとか

ストレスだとか言われたけど」

○がん病棟・廊下

片手で点滴スタンドを持ちながら、

廊下を歩いている武夫。

その隣で一緒に歩く勇作。

武夫「ああ、少しは運動もしねえばな。寝

てばっかりだと筋肉も落ちるから」

勇作「そういうもんか」

武夫「記念館で観光客さ説明するのに、病

み上がりでヒョロヒョロしてたんじゃ船

長の威厳もクソもねえべ」

勇作「だけど、あまり無理すんなよ」

武夫「心配すんな。もう出来ることだけし

かしねえつもりだ」

武夫「治らないのか」

勇作「それもわかんねえ」

武夫「……それじゃ、もう店は無理か」

勇作、うなづく。

床に視線を落とす武夫。

勇作「もう無理だ……今まで通りにはな」

武夫「？」

と、勇作を見て。

勇作「(ニヤツと笑って) おれもこれからは、

出来ることだけしかしねえ」

### ○朝日理髪店・店内

沼田の髪を切っている勇作。

沼田「それにしても考えたねえ、顔そりな

しで安くするとはさ」

勇作「ああ、もう剃刀は持たねえ」

沼田「いいんでないの。最近増えてきた、

十分くらいでカットしてくれるチェーン

店も顔そりはないし」

勇作「シャンプーもしないんだべ」

沼田「そうそう。掃除機みたいなので吸わ

れて終わり」

勇作「行っただのか」

沼田「いっぺん行ってみたくてさ」

勇作「やっぱり慣れた店でないと……とか

言ってたべや」

沼田「そうだったべか」

### ○朝日理髪店・外(日替わり)

久々にサインポールが回っている。

「都合により顔そりはいたしません」

「そのかわり理髪料を下げました」

「バリカン丸坊主五百円」の張り紙。

勢いよく戸が開いて、恵介が入ってくる。

恵介「(息を切らせて) 朝日のじいちゃん!

勇作「わっ、なんだお前驚かすなや!」

びっくりして思わず手元が狂う。

勇作「あ」

後頭部の一部を切り過ぎて、変な髪

型になっている沼田。

沼田「(不安) どうなってんの」

勇作「ごめん、金はいらさないわ」

沼田「(悟った) ……そうかい」

入口で、申しわけなさそうに身を縮

めている恵介。

その後ろから、おずおずと入ってくる

まどか。

× × ×

ソファに座っている恵介とまどか。

その前のテーブルにコーヒーを置く

勇作。

恵介「……ごめん」

勇作「いいって。別に怪我させたわけでは

なし、髪なんてまたすぐに伸びる」

恵介「また店が開いてるって聞いてうれし

くなっちゃってさ、先生もつれてきた」

まどか「よかった、すっかり元気になられて」

勇作「(うれしい) ほれ、熱いうちに飲め。

いい豆が手に入ったんだ」

恵介「ありがとう」

まどか「いただきます」

と、飲む二人。

まどか「(しみじみ) おいしい」

勇作「(にっこり) だべ? 自信作だ」

勇作も座つてコーヒーを飲む。

勇作「タケに聞いたぞ。わざわざ挨拶に来たつてな、××親方」

恵介「(うなずいて) ウチの両親も安心してたよ。××部屋なら名門だし、親方の考え方もしつかりしてるし、ちゃんと育ててくれるだろうつて」

まどか「私でも聞いたことがあるくらいですから、有名な相撲部屋なんですよね」

勇作「どこの部屋さ入るか、自分で決めたのか」

恵介「うん。いろいろ調べて、どうせやるなら厳しいほうがいいと思つて」

まどか「桜井くん、くれぐれも怪我には気をつけてよ」

恵介「(笑う) 母さんみたいなこと言つて」

まどか「だって、心配なもの」

恵介「(しみじみ) 心配してもらうのつて、うれしいね」

勇作「うん？」

恵介「高校さ行かないで相撲部屋に入門するつて言つたときもさ、怒るより先に心配してくれて、親が。なんかびつくりした」

まどか「当たり前でしょ、親なんだから」

勇作「おれは心配しないぞ」

恵介「!？」

勇作「お前なら大丈夫だと思うから心配しない。期待する」

恵介「……ありがとう」

勇作「親方とか先輩にうんと鍛えてもらえよ。自分の実力より上を目指せ」

恵介「うん、頑張るよ。石にかじりついて

も強くなってやる」

まどか「(頼もしそうに) 男だね」

恵介「はい？」

まどか「ううん、なんでもない。頑張ってる」

ニヤリと笑う勇作。

勇作「一生懸命稽古して強くなれよ」

と、恵介の肩を強く叩く。

恵介「うん。早く関取になってみんなを国

技館に招待するから」

勇作「おれもか」

恵介「もちろん」

まどか「あら、先生は？」

恵介「来てくれますか、応援」

まどか「当たり前前でしょ。教え子が天下の

横綱を目指すんだから」

勇作「なるべく早くしてけれ。歳も歳なん

だからそんなには待てないぞ」

恵介、明るい笑顔で。

戸が開いて、野球のユニホーム姿の

小学生が二人入ってくる。

小学生A「ごめんください」

小学生B「あの一、ここ、丸刈り五百円で

やってくれるって」

勇作「おお、バリカンだけだな。消費税込

みで五百円だよ」

小学生A・B「帽子をとって頭を下げて」

お願いしまーす」

目を丸くしている恵介。

恵介「……ずいぶん若くなったね、客層」

勇作「長い間お前が最年少だったけどな。

丸刈り五百円にしたらほれ、近くの野球

チームの子供たちが来るようになったん

だ」

恵介「ふうん……いいね。でも儲からない  
っしょ」

勇作「ふん、儲けるつもりもねえさ。好き  
でやってんだから」

と、立ち上がって小学生たちに、

勇作「さて、どっちから先にやる？」

その明るい笑顔がストップモーショ  
ンで。

(了)

本電子書籍は、2014年12月5日発行の『第20回函館港イルミネーション映画祭2014 第18回シナリオ大賞・受賞作シナリオ集』より、準グランプリ受賞作品を抜粋したものです。

シナリオ集のお求めや、作品の映像化につきましては、本映画祭函館事務局までお問い合わせください。

第20回函館港イルミネーション映画祭2014  
第18回シナリオ大賞 準グランプリ受賞作品

## サンセット理髪店

作：成田 匡希

※本作品の無許可掲載・転用を禁止します

---

2015年3月1日 電子書籍版発行

発行：函館港イルミネーション映画祭実行委員会 函館事務局

〒040-0055 函館市末広町4番19号（函館市地域交流まちづくりセンター内）

電話 0138-22-1037 <http://hakodate-illumina.com/>

制作：株式会社新函館ライブラリ

〒040-0051 函館市弁天町4番8号

電話 0138-84-1620 <http://www.nhakodate.com/>

---